

2020年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語 日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

2020年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語(日本語)

1. 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人並みに科学少年であつた子供の頃、夢中になって読んだ科学読物の中に、化学者ラヴオアジエの伝記があつた。とりわけ印象に残っているのは、彼がフロギストン説を論駁するために公開で行なつた燃焼実験の一場面である。そこには一枚の(1)挿絵があり、野外に集まつた貴族風の身なりをした観衆を前に、ラヴオアジエが特製のレンズで集めた光を、真空のガラス容器の中に置かれたダイヤモンドに照射している姿が描かれてあつた。

a、真空中のダイヤモンドには何の変化も起こらなかつた。b、ひとたびガラス容器の中に空気を注入し始めるや、美しく輝いていたダイヤモンドは瞬時のうちに灰と化したのである。まさに一篇の「灰とダイヤモンド」の物語であるが、そのとき子供心にも、ダイヤモンドを燃やしてしまうとはなんともつたいない、と思つたことを覚えている。その伝記には、当時ラヴオアジエが徴税請負人として巨額の富を得ていたこと(したがつてダイヤモンドの一つや二つが灰と化しても何の痛痒も感じなかつた)、そのためにフランス革命に立ち上がった民衆の(2)ウラミを買い、後に断頭台の露と消えたことがエピソードとしてつけ加えてあつた。

以上はラヴオアジエによる「酸素説」の確立、あるいはフランスの化学者ベルトラローの命名した「化学革命」の出立を告げる決定実験の一齣であるが、考えてみれば科学の歴史はこの種のサクセス・ストーリーに満ちている。曰く、ガリレオと振り子の等時性の発見。曰く、ニュートンとリンゴの落下と万有引力の発見。近くは、ワトソンとクリックによるDNAの二重螺旋構造の発見をめぐつて伝えられたさまざまな「物語」を思い起こしてみればよい。

これらの「物語」は、科学研究の本質とは無縁のaエピソードでもなければ、また「科学する心」を生徒たちに植えつけるために案出された教材の一部でもない。c、「科学」そのものが本来的にこの種の「物語」を必要としているのであり、今なお要求し続けているのである。

「科学(science)」の語源が、ラテン語の"scientia"に(3)由来するものであることはよく知られている。そして"scientia"はもともと一般的な「知」あるいは「知識」の意味しかもたず、今日見られるような、特定の対象と方法とによって特徴づけられる「科学」を含意するものではなかつた。その"scientia"を"science"へと変貌せしめたのは、ほかならぬ十七世紀の「科学革命」であつた。d、「科学」という新来の〈知〉は、たかだか三百年余の歴史をもつにすぎない。しかも、村上陽一郎の指摘を借りれば、『科学』に相当する概念が'science'について成立するようになるのは、一九世紀に入ってから」のことなのである。

〈知〉の新参者である「科学」が、それゆえにこそ「神学」や「哲学」をはじめとする権威を備えた旧来の〈知〉から自己を峻別し、「有用性と確実性」を喧伝することによってその差

異を際立たせようとしたのは、ある意味では当然のことであった。自己の出自の卑しさを覆い隠し、現在の自己のアイデンティティを確立しつつその「正統性(legitimacy)」を誇示しようとするとき、かつて自らがそうであったもの、そして自己と「似ていて異なるもの」に対して、ことさらに厳しく(A) 差別意識を行使しようとするのは、〈知〉の世界であろうとも変わるところはない。少なくとも古代中世においては〈知〉の光背を身に帯びていた占星術、錬金術、心霊術、等々に対して、近代以降に投げつけられた「非科学」あるいは「擬似科学」といった蔑称は、まさにそのような近親憎悪の現われにはかならなかった。わが国における西洋医学の漢方医学に対する優越意識もまた、根はそこにまで(4) 廻ると言うべきであろう。

いささか意地の悪い見方をすれば、このような「差別」のヒエラルキーを固定化し、新来の〈知〉の権力を確たるものにするためにこそ、科学は自己を聖別する一つの「物語」を必要とし、また自ら創り出しもしたのである。この点に関する限り、科学的〈知〉の正統化のプロセスは、政治権力の正統化のそれと、(B) ほとんど選ぶところはなかったと言わねばならない。征服者としての大和朝廷によって『古事記』や『日本書紀』が書かれねばならなかったように、新たに〈知〉の王位を簞簞した「科学」は、その周りに自己の来歴を飾り立てる科学史家や、王権の大義名分を明らかにする科学哲学者を必要としたのである。そのことと、「科学史」や「科学哲学」の学問としての成立が十九世紀中葉であったこととは、決して無関係な事柄ではない。『帰納的科学の歴史』(一八三七)や『帰納的科学の哲学』(一八四〇)を著したW・ヒューエルが、同時に社会的身分としての「科学者(scientist)」という呼称の造語者でもあったことを、われわれは忘れるべきではないであろう。科学的〈知〉を職業的に担う階層の出現と、科学史および科学哲学の成立とは、ほとんど時を同じくしていたのである。そして、少なくとも一九六〇年代にクーンの『科学革命の構造』が書かれるまでは、科学史や科学哲学は科学的〈知〉の正統性を擁護し、それを聖化する護教的な「物語」を再生産することに イを貸してきたと言わねばならない。十七世紀の科学革命を象徴するF・ベーコンの「知は力なり」という(5) シユウチの言葉は、その意味でM・フーコー流に、「知は権力なり」と読み換えられてしかるべきなのである。

(野家啓一『科学の解釈学』〈講談社学術文庫〉による。151～154頁)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字にはその読みを記せ。

- (1) (2) (3) (4)
- (5)

問二 空欄 a ～ d にあてはまる最も適切な語を、次の の中からひとつずつ選ぶ。ただし、同じ語は二度使ってはいけない。

としろが それゆえ もちろん かしら

9

C

T

問三 空欄アにあてはまる最も適切な語句を次の中から選び、○を付けよ。

- ① 鶏冠のついた ② 翼のはえた ③ 尾鰭のついた ④ 尻尾を出した

問四 空欄イにあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○を付けよ。

- ①口 ②手 ③耳 ④胸

問五 傍線部(A)「差別意識を行使しようとする」とは、具体的にどのようなことが、本文中の語句を用いて説明せよ。

問六 傍線部(B)「ほとんど選ぶところはなかった」とあるが、どういうことか。本文中の語句を用いて具体的に説明せよ。

二、問一～二に答えよ。

問一 次の文中の空欄 (①) ～ (⑩) に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の () 内に直接記入せよ。

私たちは、自分の属している社会の風習に対してあまり疑うことなく、それが普遍的 (①))、と思い込みがちです。たとえば、日中ずっと勤勉に起きていて、眠り (②)) 夜間に連続してとるのがあたりまえと思っています。ところが、この眠りのパターンは、一部の文明社会で働いたり学んだりしている限られた人たちだけ (③)) 実行しているもので、かなり特殊なものなのです。

しかもこの眠りのパターンは、自然な生理的欲求を抑圧して、文化ない (④)) 社会の規律を強制する人為的なものでもあります。ですから、こんな眠りかたは“反自然的”とも“非自然的”とも受けとれるものだ、とさ (⑤)) 言えるのです。

睡眠はもともと適応力 (⑥)) 富むものです。ですから、ごく大まかに言うなら、眠りについてあまり神経質 (⑦)) 考える必要はありません。とくに、若い人の眠りは、かなり融通 (⑧)) きくものです。それゆえ、睡眠 (⑨)) 多少とも犠牲になるような生活をしたところで、なんとか埋め合わせができるのです。しかも、若い人は容易に熟睡することができますから、量の不足を質 (⑩)) 補うことも容易にできるのです。

(井上昌次郎『ヒトはなぜ眠るのか』(講談社学術文庫)による。51～52頁)

問二 次の文中の空欄（ ① ）～（ ⑩ ）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

「二で、ちょっと止まって、「よい本」ということについて考えてみたいと思います。わたしたちは、「子どもによい本を」などと気軽に（ ① ）が、「よい本」とはいったいどんな本をいうのでしょうか。わたしは、本それ自体に「よい」「わるい」というレッテルをはることは（ ② ）と思っています。本は読まれてこそ意味が生じるものです。ですから、読む人、すなわち読者がその本をどう（ ③ ）かによつて、よいわるいの評価も生まれるのだと思うのです。

読者と関係なく、はじめからよい本が（ ④ ）のではなく、ひとりの読者がある本に出会って、それがなんらかのよい結果を生んだとき、その本は、その人によつて、「よい本」に（ ⑤ ）のだと思います。その本を読んで知らないことを知った、空想力を刺激されてふしぎ世界を体験した、面白くて大笑いした、しみじみと人の心の深みにふれた等々、いろんな形でこころを動かされ、たのしい思いをしたら、それが、その子にとってのよい本なのです。

あまり大した本ではないと一般に思われている本でも、そのなかの一節、あるいは一枚の挿絵が、読む人に忘れがたい印象を残すということもあるでしょう。子どもの場合、それほどよく（ ⑥ ）作品でも、想像力で大きくふくらませて読むので、満足のいく読後感を得ることもあります。

逆に、「よい本」とされている本を読んでも、（ ⑦ ）という感想をもつこともありましよう。ある種の本は、ある年齢に（ ⑧ ）とおもしろさがわからないことがあります。好みや、そのときの興味のありようが、ある種の「よい本」を、ある人には無縁のものにしている場合もあります。

古典といわれる本は、万人が認めた「よい本」であるわけですが、そのよさは、だれでもがすぐ（ ⑨ ）うものではありません。読者の側に、そのよさを味わうだけの準備が（ ⑩ ）、あるいは、出会い方がわるいと（教科書に載っていたからつまらなかった、という声をどんなにたびたび聞いたことでしょう！）、たのしむというところへはなかないけません。

（松岡享子『子どもと本』（岩波新書）による。161～162頁）

三 次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

小さなコンピュータで動くということは、インターネットにつながりつるコンピュータの数を増やしました。また、プログラミングがやさしいということは、インターネットのプログラマーが増えるということです。それはつまり、インターネットを支えるエンジニアがたくさんいるということなのです。本当に二時間ほど講義すれば、ほとんどコンピュータを知らない人でも、インターネットのプログラムを書くことができるようになります。

だから、世界中に分散しているネットワークの集合であるにもかかわらず、インターネットは支えられているのです。世界中でもっとも大きな通信網であるインターネットが、こんなに簡単な仕組みでできているのかということに驚かれると思うのですが、簡単な技術であるということは、規模が非常に大きくなることと、たいへん重要な関わりをもっています。

実はインターネットが新しい^新プロトコルを設計しようとしたときに、たいへん大きな議論になったのが、この点なのです。ふつうは、新しい技術をつくらうというときには、原理と哲学、そして、技術的な仕組みについて議論しながら決めるのですが、インターネットの技術を決めていくときには、どれだけの技術者がその技術を支えられるだろうかという、人間の能力の問題を非常に重視します。つまり、どんなよい技術でも、それを支えることのできる技術者が少ないならば、普及して運用されることがない、と考えているのです。

こういうことは、たぶんコンピュータ・サイエンスの世界のなかで、いままで議論されていなかったし、ほかの技術の面でもあまり議論されていなかったことではないでしょうか。このことが、世界中のコンピュータを包むという、たいへん大きなネットワークをつくっていくための技術を進めていく土台にある、根本的な哲学だと言えらると思います。

ここまでのところで、インターネットの仕組みについて、かなりいいかげんではないか、という印象をもたれるかもしれません。しかし実際、インターネットの技術のおもしろいところは、「いいかげん」な技術の集合であることです。それが、なんとなく動く。インターネットの専門家たち自身が「奇跡」と言っているようなことが、たくさんあるのです。

緻密に考えていったら、まずこれだけの規模のものが動くわけがないと結論するのが普通です。インターネットのユーザーが仮に五〇〇〇万人として、五〇〇〇万人が同時にビデオ会議をしたら絶対に動きません。

そこで、五〇〇〇万人が同時に使うということはどの程度ありうるのか、五〇〇〇万人が使ったらどうするのか。利用の変遷の予測はどうか。それに対応した技術の見通しはあるのか。こんなことを議論し、検討し、慎重に進めていく必要があるといわれてきました。しかし、インターネットはリスクが小さいのですから、いろいろな試行を繰り返し、とにかく開始することで発展してきました。

インターネットで大切なのは、コンピュータとコンピュータの間で、データが絶対に着かなくてもいい、でも「ほとんど着く」ということなのです。そのくらいのレベルでとにかくつないで置いて、その上の信頼性がほしいときは、「ほとんど着く」のだから何度もやれば確実につくだろうという考え方です。

(村井純『インターネット』(岩波新書)による。40～44頁)

解答欄

[illegible]